

随想

一七四二年当時の住人は誰？

戸山 恵子

(会員 佐伯市匠南)

佐伯史談二一五号、佐伯城絵図解説を読ませて頂きました。

三十二ページに原図のコピーのコピーが載っていて、確かに地図の中央やや左下(大手門の左側)に「撰津守居住」が読み取れて、とても興味深い思いがします。

この地図の製作年代を、撰津守(高通)の死亡年、一七三三(享保十八)以降はありえないと小野氏は指摘されていますが、はつきりと断言はできないのではないのでしょうか？

撰津守(高通)は、一七〇三年(元禄十六)に、六代高慶の長男として正室(琨子)との間に誕生。

十五才で將軍吉宗に拝謁、この時に「撰津守」の名前を

もらいますが、翌年、御礼言上のため江戸城に登城、その拝謁が終わらないうちに俄に発病、そのまま退出してしまふ。という失態をしでかしてしまっています。

その後、病弱を理由に廢嫡、家督は、弟の大八郎(高能)が僅か四歳で継ぐこととなります。

その後、撰津守(高通)は、一七二〇年(享保五)から亡くなる一七三三年(享保十八)まで、佐伯で生活しています。(三十一歳にて歿す)

確かに一七四二年(寛保二年)には、この世には存在していないのですが、撰津守本人が亡くなったからといって、すぐに住居は取り壊されるものなのでしょうか？

罪人ではない限りそうはならないと思います。

彼には家族がいました。

佐伯で結婚もし、二人の子どもがいました。

一家の主人は亡くなっても、夫の菩提を弔い、子どもたちの教育を任されたのは未亡人だったはず。

撰津守には正室はいなかったらしいけど、側室の藤田勘子との間に、寅太郎・安次郎という男の子がいました。

撰津守の後、家督を継いだ高能が、二十四歳の若さで急

死すると、後継に寅太郎が決まり江戸の祖父、高慶の元へ上ります。

七代高丘となったわけです。(一七四〇年・元文五年)

この時、勘子は船出を見送ったという記事が「温故知新録八」にありますから、佐伯にいたことになりませう。

息子の寅太郎(高丘)は、表向きは祖父高慶の養子で嫡母を祖父の正室、宗現子にしていますから、藩主一家には属さない立場にあるとしたら、三の丸御殿には入らずに、夫の死後も、息子が藩主になってからも、「摂津守居住」に居続けた、といっても、藩主の生母という立場は揺るぎなきものですから、息子高丘・一高、孫の高標らによって手厚い保護を受け、晩年を過ごしたと思います。

「嫡子摂津守居住」は、摂津守(高通)の没後も、少なくとも、藤田勘子が亡くなる一七六三年(宝暦十三)までの三十年間は存在したと思いたいのです。

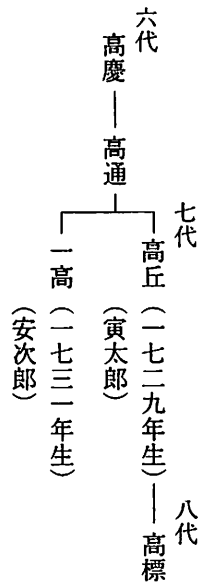
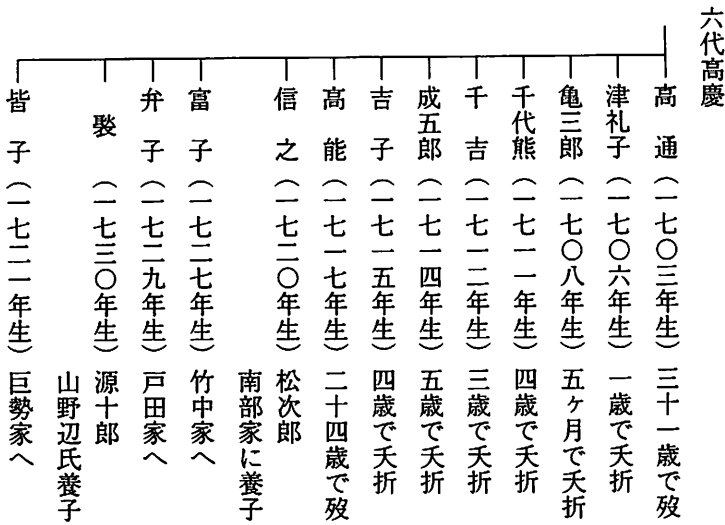
余談ですが、勘子(慈慶院)が亡くなって十数年後の一七七年(安永六年)、摂津守(高通)一家の在った場所近くに「四教堂」が創立。夫婦の孫にあたる八代高標が設立し、以後、藩校として脈々と多数の人材を出し、文化の

中心だったことに何か不思議なものを感じます。

病弱を理由に廃嫡され、お家騒動めいた話も伝わる摂津守ですが、佐伯の暮らして子孫を残せたことに安堵感を覚えました。



〔毛利家家系〕鶴藩略史・温故知新録参考



※高慶十三人の子どもの内、無事に成長したのは後半の五人のみでした。

また、温故知新録四、五、六、七、八巻によれば佐伯で生まれた高慶の息子たち(松次郎・源十郎)は、高通の息子たち(寅太郎・安次郎)と年齢が近く、良き交わりを持っていたことが伺えます。